



第 2 回

上を向いて歩こう

平成 22 (2010) 年 8 月

大正 11 年 11 月、来日したアインシュタインは「近代日本の発達ほど世界を驚かせたものはない。その驚異的発展の原動力は、3000 年の歴史を通して一系の天皇を頂いていることであろう。世界の未来は今後進むだけ進み、その間幾度かの戦いが繰り返され、最後には戦いに疲れる時がきて、その時、人類は真の平和のため世界的盟主を求めることになるだろう。その盟主たるものは、武力や金力に依らずしてあらゆる国の歴史を抜き越えた、尊い系譜でなければならない。世界の文化はアジアに始まって、アジアに帰るだろう。そして、アジアの高峰日本に立ち戻らなければならない」と、こんな趣旨の講演を同志社大学で行ったという。

第 2 次大戦中、詩人で元駐日フランス大使ポール・クローデルは言った。「私には絶対に滅亡して欲しくない民族が 1 つある。それは日本人だ。彼らは貧乏だが高貴だ。彼らほど興味ある太古からの文明を持っている民族を私は知らない」と。

この他にも、日本を訪れた多くの外国人の見聞録は「日本人の礼儀正しさ」と「文化度の高さ」をしきりに称えているし、更に 20 数年前、元ロンドン大学教授で歴史学者のアーノルド・トインビーは「今後世界をリードする国はアメリカでもソ連でもない。彼らは力を過信し、歴史の教訓を学ばないからだ。先達の過ちを認識して、先達より有望な手段を探求し得るのは東アジアの国だ」と、喝破している。

さて、何年か前、日下公人氏が「致知」誌上で、「移民の寄せ集めで人々の信頼関係の薄いアメリカは、事ある毎に弁護士が登場する訴訟社会だし、中国は、孔子が出た誉れ高き国でありながら、いまや徳のない国に墮している。恥の文化を持ち、徳を備え相互信頼が根付いている日本こそ、将来世界の主役になり得るのでは」といった趣旨のことを述べておられたことを、ふと思い出す。

敗戦によって総てを失った日本人は、とかく自閉自虐に走りがちで、特に最近の政治・経済の凋落の中で活力を失い、人心まで拉げて荒廃し、いまや総じて下向きに俯いて、とぼとぼと彷徨っている感すらある。 獮は夢を食べて生きると言われ、人間も亦夢を求めて挑戦する誇り高き獮である。かつて、住友金属工業(株)日向方齊会長は「仕事は夢で始まり、情熱で続き、義務感で達成される」と言われ、「多民族国家アメリカの相互接着剤は夢と希望である」と、何かに書いてあった。

「人間は年を重ねるから老いるのではない。理想や情熱を失って魂が死ぬから老いるのだ」と、サムエル・ウルマンも説いている。

先の論調は、今日の日本の現状に照らせば荒唐無稽・奇想天外の感は禁じ得ないが、こういう時代だからこそ我々は時計を逆回りさせて、ユニークで由緒ある歴史を振り返り、原点に立ち返って自負と誇りを取り戻し、特に、世界で唯一の核被爆国として平和を先導し、大いなる夢に向かって上向きに前進すべきではないかと切に思うのである。

渡邊 明 九州工業大学名誉教授

夢アイデア審査委員会 初代（平成 14 年～17 年）委員長